

「勇気づけ」のある教室をめざして

～小学校の実践から～

尾中孝司 (高知)

ほとんど聖なる義務といってもいい教師の最も重要な仕事は、どの子どもも学校で勇気をくじかれることがないように、そして、既に勇気をくじかれて学校に入る子どもが、学校と教師を通じて、再び自信をとりもどすよう配慮することです。このことは教師の仕事と密接な関係があります。なぜなら、未来を希望に満ち、喜びを持ってみている子どもたちと一緒にいるときにこそ初めて、教育は可能になるからです。

(アルフレッド・アドラー)⁽¹⁾

要旨

キーワード：

私は小学校教員です。小学校現場でアドラー心理学を実践するということは、「勇気づけ」(以下、勇気づけ)を実践していくことであると考えます。小学校現場で学級担任として、クラス全体へ働きかけ、子どもたちをどう勇気づけようとしているかについて自分の実践をまとめてみました。

なお、本稿では、勇気づけを「自分は能力がある」「人々は仲間だ」と感じてもらえる働きかけと定義します。⁽²⁾

1. 学校教育目標と勇気づけ

自分が担任する学級でアドラー心理学を実践していくには、どういう考えや目的を持って子どもたちに接しているかを上司や同僚へ説明して、理解してもらう方が良いと思います。

近年、学校現場でも、上司との面接があり、自分の学級経営について説明をしなくてはならなかったり、実践発表を校内で同僚にしたりという場面が増えてきました。これは自分の考えを説明するチャンスです。そのような場では、私は学校教育目標と勇気づけを関連させて説明するようにしています。

「学校教育目標」という言葉は、学校関係でない方には一般的ではないかもしれませんが、どこの学校もそれぞれの学校が掲げる学校教育目標を実現するために、すべての教育活動を行っているということになっています。

例えば、次のようなものです。(インターネットで「学校教育目標」と検索すれば、よりたくさんさんの学校教育目標をみることができます。)

- 為すことから学び、学んだことを生かす子どもの育成
- 未来を創造する豊かな人間性と確かな学力を身につけた生徒の育成。
- 人間尊重の教育を基盤に国際社会に生きる日本人として、心身共に健康で、自ら学ぶ意欲を持ち、創造的に考え、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童を育成する。
- 地域を愛し、自分の未来を切り拓くたくましさを身につけた子ども

学校教育目標だけでは、具体的にどういう子どもを育てるかということが分かりにくいので、学校教育目標の下に「目指す子ども像」というものを設定している学校も多いです。（と言っても、「目指す子ども像」も具体的ではないことも多いです。）<図1>

私は、「本校の学校教育目標を具現化するための前提として」という題の図とともに、勇気づけを目標にしていることを説明するようにしています。<図2>（パワーポイントでこのようなスライドを作っておくと、どの学校へ転勤しても使えるので便利です。）

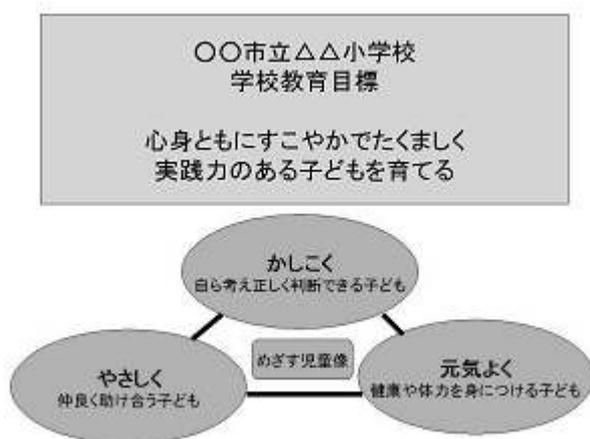
この時、アドラー心理学の言葉ではありませんが、教育界ではよく使われる「自己肯定感」「自尊感情」「支持的風土」などという言葉もちりばめておくと上司や同僚に受け入れられやすくなります。（これらの言葉を入れるのは、説明のための戦略と考えています。）

また、担任として学級をどう経営していくかをまとめた「学級経営案」という書類も年度当初に作成することになっていますから、その中にも勇気づけを関連させて明記しておくようにしています。

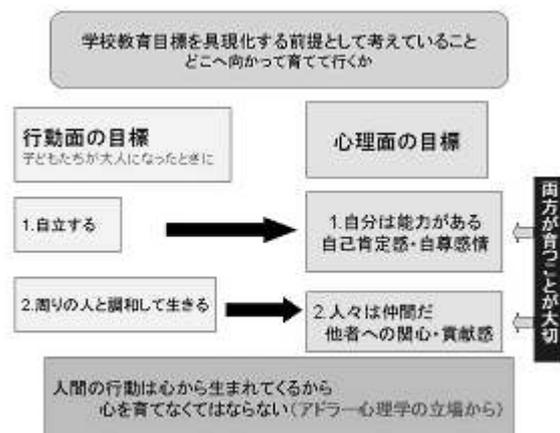
「心身ともにすこやかでたくましく実践力のある子ども」とは、まず、「自立している」「自律できる」「周囲の人たちと調和しながら、協力して生活できる」ことが必要である。そのためには、「自分は能力がある」「人々は仲間だ」という二つの気持ちが育っていることが重要であると考える。授業やその他の時間においても、あらゆる場面で自分とかわる子どもたちに、この二つの気持ちを育てることを心がけて行きたい。

<ある小学校の学級経営案(尾中作成)「学校教育目標の達成に向けて担任として取り組む姿勢」欄より>

今までいくつかの勤務校で説明して来ましたが、『「自分は能力がある」「人々は仲間だ」という心を育てる』という目標について賛成されたことはあっても、反対されたことはありませんで



<図1> 「ある学校の学校教育目標とめざす児童像の例」



<図2> 「勇気づけについての図(尾中作成)」

した。

2. 学級での勇気づけ

自分の学級経営方針をはっきりとさせたら、後は学級で勇気づけをどう行っていくかを考えて、実践していただくだけです。どう実践していくかを考えるときに、「わたしは能力がある」「人々は仲間だ」と感じてもらえるかどうかを視点としています。⁽¹⁾

① 学級の目標を決める

4月当初に「この一年間、みんなと先生でこのクラスをどんなクラスにしていきたいですか?」と言って、子どもたちと話し合っただけです。子どもたち同士の間で、また、担任である私と子どもたちの間で目標の一致を図る目的です。(今年度、担任しているクラスでは、「仲のいいクラス 楽しいクラス みんなで教えあえるクラス」と決まりました。(写真1))

次に、その目標に向かって、自分がどうするかを一人一人考えてカードに書いてもらいます。「なかのいいクラス」にするために、「私は人のいやがることをしない。」「ぼくは、けんかをしても仲直りをする。」「毎日おしゃべり話をする。」というような考えを子どもたちは書いてくれます。

そして、月に一回程度、みんなで決めた目標にみんな近づいていっているかどうかの話し合いをします。話し合った後で、自分がどうするかを変更したい場合は、カードに再度書いてもらって、以前書いた自分のカードの上に重ねてはっていくようにしています。

何かトラブルがあったときでも、「このトラブルをどうしたら、みんなで決めた目標に近づいていくか」を話し合っただけです。考えてもらうようにしています。

② 宿題は自分で選んでもらう

宿題はいくつかのメニューを提示して、その中から子どもたちに自分で取り組んでもらうようにしています。いわゆる「自学帳」方式です⁽²⁾。自分で選ぶことができる選択肢があるということが子どもたちには人気です。



写真1

授業と自学帳は密接に関係しています。日々の授業が子どもたちにとって分かりやすく、面白いと感じるものになっていけば、授業で学んだことや授業で話題になったことについて子どもたちが調べたこと、考えたことなどが自学帳に書かれるようになっていきます。

学級通信で自学帳を紹介することもあります。この写真のようなノートを見せ合うコーナーを教室の中に入れておくと便利です。手軽に見せ合うことができます。ノートを紹介されることが、みんなの参考にな

[自学帳のメニュー例]

※注：子どもたちに配付するプリントの例ですから、子ども向けの文章になっています。

Aメニュー（毎日するのがおすすめ）

1. 漢字練習（漢字テストあわせて）
2. 本読み（読んだページやおうちの人のサイン、自分で思った自分の読み方の良さを記録しましょう。）
3. 計算（2問以上。今まで習った問題でもいいです。）

Bメニュー（自分で選んでする内容）

1. 今日の授業で発表したかったこと——今日の授業で発表したことを書く。
2. 今日の授業で——今日の授業の中で心に残った友達の発言や先生の言葉や自分の発表を書く。
3. 言葉の意味調べ——教科書の中の意味のわからない言葉と辞書で調べたその言葉の意味を書く。
4. 新聞、テレビから——興味のあるニュースとそのニュースに対する自分の感想を書く。新聞を切り取ってはりつけるといいかも。
5. 日記——できごとを一つにしぼって書くといいですよ。
6. 歴史調べ——社会科の教科書や資料集、図書の本などを読んで調べたことを記録しましょう。
7. 今日の自学の感想——今日の自学感想を3行以内で書きましょう。最後にするといいメニューです。
8. 自分で考えたメニュー

って、みんなの役に立つということ子どもたちに言いながら紹介するようにしています。

③ 自分の成長をふりかえる

小学生は、授業ごとに、また毎日、何かできるようになったり、分かるようになったりします。子どもたちに自分の成長を意識してほしいので、「今日の成長」という題で簡単な文章を毎日、書いてもらうようにしています。帰りの会の中で書いてもらったり、自学帳の中で書いてもらったりしています。

- 計算ドリルの、割り算の答えが頭にすぐ浮かんでくるようになりました。むずかしい問題は九九をとえるとできました。
- 算数の時間に割り算が分からなかったけど、先生に質問して、教えてもらってできるようになりました。
- 今日の成長は「がまん」です。なぜかという、7時から見たいテレビがあったけど、宿題をしていなかったの、見るのをがまんしました。

④ 適切な行動に注目を

子どもたちの適切な行動を見つけたときに、声をかけるだけではなく、記録するように心がけています。そのため、5 cm × 5 cm 大のポストイットとペンを持ち歩くようにしています。

このやり方だと、担任が見つけた適切な行動だけしか記録できないので、自学帳に「今日のありがとう」というメニューを入れて、「友だちやおうちの人がしてくれたことで、お礼(れい)を言いたいことを書きましょう」と呼びかけたり、写真のような「ありがとうカード」を一人ひとりに持たせたりしています。（この「ありがとうカード」には、「ありがとう」と言いたい行動について誰でもが書き込むようにしています。）

自学帳と同じように、子どもたちのノートの適切な部分を具体的に示して紹介するようにして



写真2 < 自学帳の例 >



写真3 < ノート紹介コーナー >

います。例えば、次のような算数ノートには、「等号 (=) をたてにそろえて書いているのがいいですね。さしも使って、ていねいなノートです。」とコメントをつけて学級通信で紹介しました。

同じ号の学級通信では他のノートについて次のように紹介しています。

適切な面を紹介するために工夫した方法を写真とあわせて紹介してみます。

⑤ 授業の中で

授業で「わたしは能力がある」「人々は仲間だ」と子どもたちが感じてもらえるようにするにはどうしたらよいのでしょうか？

「わたしは能力がある」と感じてもらうには、授業の中で「できる」「分かる」と感じる必要があるでしょうし、「人々は仲間だ」と感じてもらうには、「みんなと学習して楽しい」「よかった」「他の人の役に立てた」と感じてもらうことが必要でしょう。結局、「友だちや先生と関わり合いながら、できるようになる、分かるようになる授業」だと考えています。⁽²⁾

言葉にすると、当たり前のことですが、授業をどうするか計画するにしても、どんな関わり合いを取り入れて、できる、分かるに近づくかを考えています。最近、上越教育大学の西川純氏の提唱する「学び合い」を積極的に取り入れています。⁽³⁾

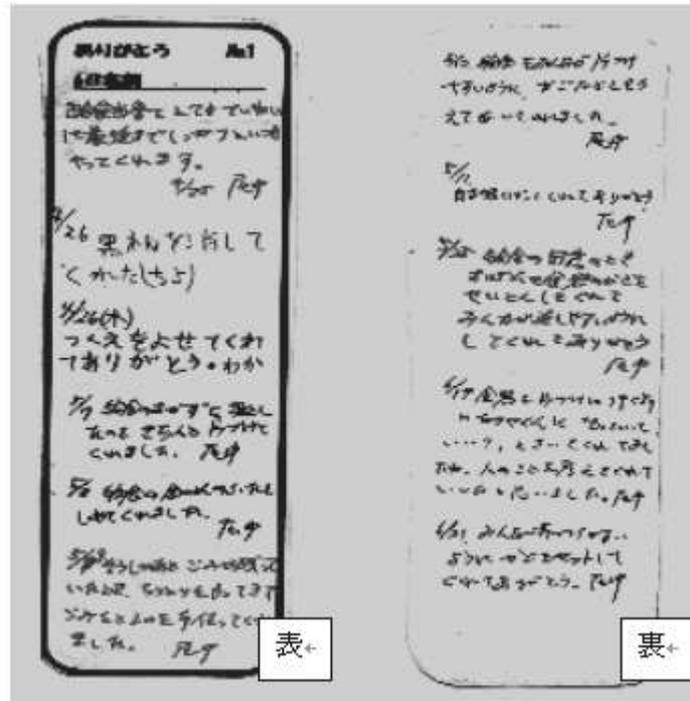


写真4 <ありがとうカード>

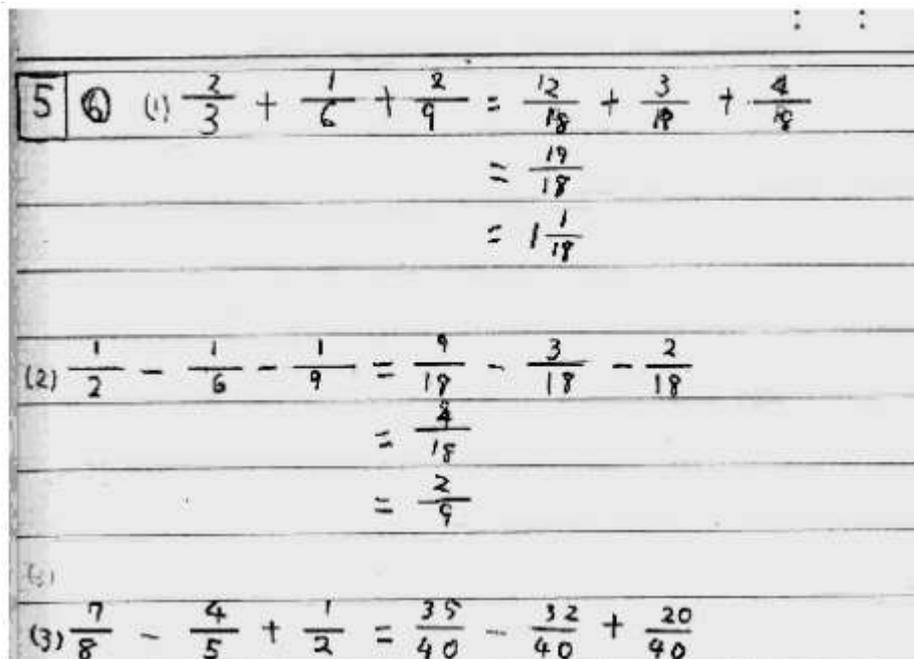
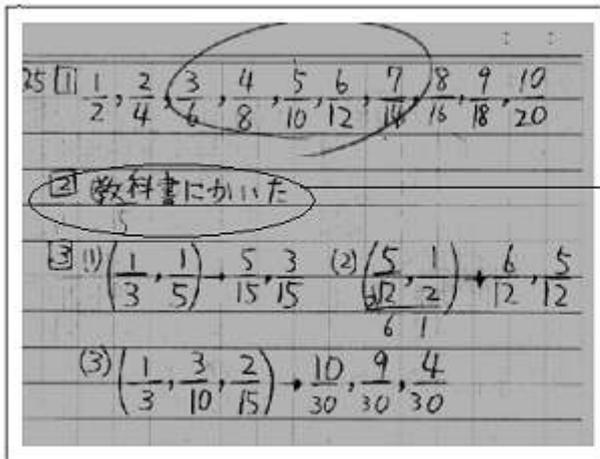
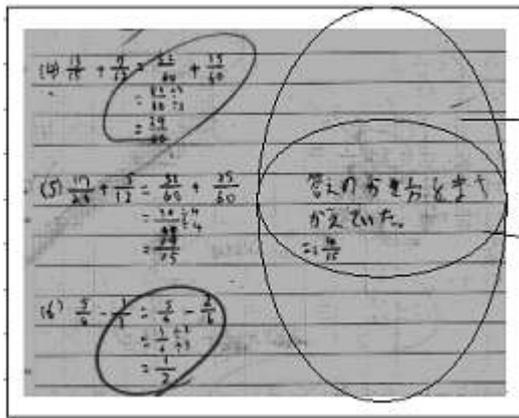


写真5 <ノート1>



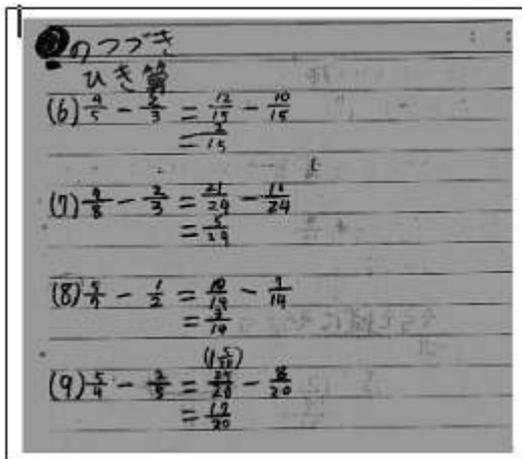
自分で工夫して学習の記録を
しっかりとしていますね。て
いねいなノートです。

写真6 <ノート2>



ノートの右半分をあけて、間違いなおしに使っています。まちがったわけを自分で分析して書いています。

写真7 <ノート3>



ノートの右半分をあけて、広くノートを使っています。印刷では分かりにくいかもしれませんが、色鉛筆も使って、工夫しています。

写真8 <ノート3>



写真 9

図工の作品を掲示するコーナーです。製作途中の作品も掲示しています。友だちの作品を見ながら、色の塗り方や絵の描き方などについて休み時間に話し合っている子どもたちもいました。



写真 10

コンテ(クレヨン的一种)を使って修学旅行で見学した仏像等を描いた作品です。水彩絵の具だとどうしても巧拙がはっきりしますが、コンテを使うと、どの作品も味があって、上手に見えてくるように思います。

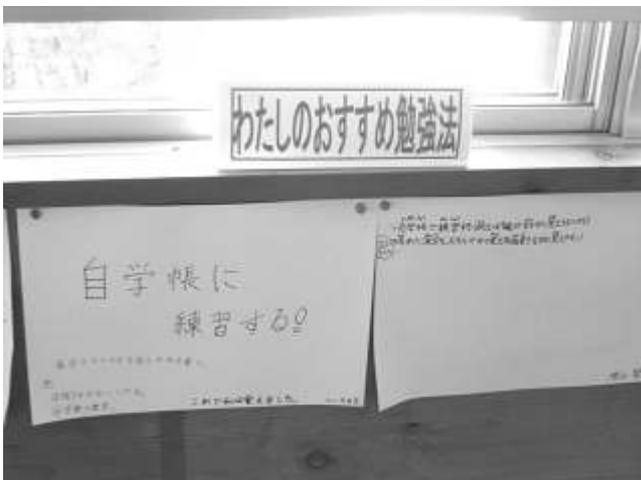


写真 11

「わたしのおすすめ勉強法」と題したコーナーです。例えば、漢字が得意な子どもには自分の漢字勉強法について紹介してもらいます。色々な勉強法があって参考になるようです。

3. おわりに

近年、学校現場では、心理学の理論に基づいたさまざまなプログラムを授業として行うことが流行しています。

アドラー心理学を学ぶ中で早期回想というアイデアを知りました。早期回想は 10 才頃までの記憶であり、早期回想として語られる場面はほんの些細な場面であることが多いということも知りました。10 才といえば、小学校 4～5 年生です。

どの場면을早期回想として思い出すかは、その個人に任されますが、小学校で子どもたちと接している私たち教員は、日ごろの学校生活のあらゆる場面で勇気づけを考えていくことが仕事であり責任ではないかと思えます。

子どもと一対一の場では『パセージ』を参考にして対応できます。そこでも「わたしは能力がある」「人々は仲間だ」と感じてもらえるかどうかを視点に対応を考えていきます。それならば、学級全体にも 2 つの視点で常に考えながら活動を投げかけていけばいいのではないかと考えています。ここには書ききれなかった実践もたくさんありますし、書いた実践も当たり前のことばかりを書いたように思います。小学校では当たり前のように取り組まれていることを「わたしは能力がある」「人々は仲間だ」という 2 つの視点から見直して、毎日の学校生活を繰り返していくことがアドラー心理学を小学校現場で実践することになるのではないのでしょうか？

本稿が、小学校現場の先生方にほんの少しでもお役に立つことがあればうれしいのですが…。

<参考文献>

- (1) A・アドラー著 岸見一郎訳：子どもの教育. 一光社, p.83, 1998
- (2) 自学帳については、『自学のシステムづくり』（岩下修著・明治図書 1992 年）、『自学ノートの指導技術』（明治図書 1995 年）シリーズ等を参照してください。
- (3) 授業で勇気づけることについては、『授業の中でも勇気づけを』（尾中孝司 . アドレリアン 47.237 - 250,2005）にもまとめています。
- (3) 「学び合い」については、西川純著『まなび合いの仕組みと不思議』『「座りなさい！」を言わない授業』『「静かに！」を言わない授業』（すべて東洋館出版社）等に詳しく書かれています。また、上越教育大学・西川純研究室のHPにも説明があります。URL は、<http://www004.upp.so-net.ne.jp/iamjun/index0/index2.html> です。

更新履歴

2013 年 5 月 1 日 アドレリアン掲載号より転載